

広島俳句倶楽部

令和六年一月作品集

上州の秋を行く 森口良樹

学生時代に日本一周をしたのは、いまから五十数年前のこと。東京を出発し、仙台の七夕、平泉、青森の奥入瀬、青函連絡船で函館、襟裳岬、網走を経て宗谷岬、小樽と道内を一周し、秋田、金沢、大阪万博、淡路島、四国桂浜を抜け、佐多岬から九州一周へ、国道二号、一号を駆け抜けて一か月半で全国を回った。途中の大まかな名所は事前に調べて回ったが、関東の日光へは、いつでも行けると當時は思っていた。結局、卒業するまで一度も足を運ばず、故郷に就職した。いつか日光東照宮に参拝したいと思っていたが、思いがけず、妻から紅葉の日光へ行つてみないかと持ち掛けられて、二つ返事で了承した。地元の高尾の秋のツアーで待望の日光に旅行だ。上州路を巡った紅葉の旅は格別な数日であった。

搭乗券握る夫婦に秋日和

湯めぐりに会ふ龍田姫浅間山

秋閑くるガイド行き交ふ東照宮

秋澄むや鳴き龍睨む輪王寺

半眼に見下ろす阿弥陀秋深し

昼食のツアーの膳に茸飯

湯畑に人影絶えぬ夜半の秋

後の月だらだら坂に湯もみ見て

秋の朝森林浴へ宿を出づ

秋惜しむ一路羽田へツアーバス

《作品鑑賞》

暁子

十句を通して旅の楽しさ、錦秋の豊かさが溢れています。紅葉の季節、日光や上州にご夫婦でのツアー旅、美しい限りです。

搭乗券握る夫婦に秋日和

「搭乗券握る」がこれから始まる旅への期待と高揚感を表現し、秋日和とよく呼応しています。

湯めぐりに会ふ龍田姫浅間山

龍田姫は紅葉に関わる女神とか、湯上りの目に浅間山の女神はさぞかし美しかったことでしょう。龍田姫は一度使ってみたい季語です。

半眼に見下ろす阿弥陀秋深し

半眼の阿弥陀仏に秋深しの季語は巧みで、荘厳で静寂な感じがよく伝わってきます。

後の月だらだら坂に湯もみ見て

湯もみを見た後、そぞろ歩きに見上げれば後の月が煌煌と美しく、この上なく充足した旅であったことが伺えます。

前文にある森口さんの青春は私の遠い日と重なり懐かしく拝読しました。

佐保光俊

吉備線の聞こえてきたる初湯かな
鬼ノ城のくつきり見ゆる二日かな

村上正人

セール待つ列に差したり初日影
櫓の傍押し行けり車椅子

高尾ひとみ

茶を淹れて窓に待ちたり初明り
初参僧は最後に利他を説き

あざみ

合掌の指を染めたる初日の出
新しき句帳に一句年新た

亜矢

指そろへ母へ挨拶お元日
鍵盤を拭きピアノ弾く二日かな

綾乃

いもうとに奢ってもらふ花びら餅
瀬戸焼の菊はぐれゆく七日かな

井藤希

ゆうゆうと日の昇りくるお元日
初雀日向に集ひ諍はず

栄吉

初詣出産近き娘連れ
風揚や大空朱くなり始む

大畑恵

マンションの向うに昇る初日かな
七草を畑に摘んで粥を炊く

暁子

弥山嶺の影浮び来る初明り
少年の登駆け上る初参

すみれ

青空の瑞雲のいま近づきぬ
年明けて進路決めたとき子のメール

知佳子

初声やまた一十点く窓明り
海見ゆる頃にうたた寝初電車

ちどり

義母遺す記念硬貨のお年玉
祖父植ゑし芝生の土手で風を揚ぐ

辻純江

初詣行列につく三世代
二日はや遍路姿の行きにけり

雲雀

門を出て初東雲に手を合はす
女正月堂々欠伸してをりぬ

ふじ女

去年今年お氣に入りがつまらなく
リンパだのホウレイだのと初鏡

松田裕子

初荷船丹田揺するエンジン音
左義長へ風の生まるる谷のあり

森口良樹

小雞にと願ふ大願初日の出
元朝の社殿に越天樂流れ

大原良子

刻みつ七草の名を子に教へ

金川昭子

歳重ねこれが最後と年賀状

上島康子

初声やまだ薄暗き日の出前

河原静子

母思ふ御節料理や筑前煮

紀英子

新年や若景マークの車過ぎ

熊谷ゆり子

初苗つぎつぎ人の登り来る

桑門わかこ

蛤の大きすぎたる雑煮かな

須美れい

秒針に耳を澄まして去年今年

高嶋銅代

氏神に御朱印を受く初詣

高梨英子

仏壇の薫香れる去年今年

民

雨の手を高く広げて初日の出

土肥律子

電車待つ人の背中や年初た

撫子

初仕事ひと息吐いて白衣着る

みさ子

福飴や幼子の頬いつばいに

美耶

玄関の日溜りに来る初雀

やす保

にぎやかに子らを見送る二日かな

冬の山いくつ連なる大路かな

冬の海ときをり見ゆる大路かな

周防への最後の峠落景踏む

瀬の音に年詰まりゆく安芸周防

寒禽や大路は海を遠ざかり

ゆるやかな峠や池の水涸れて

落景来て探しあてたる古墳かな

年の瀬の谷深く日のあたりをり

臘梅や行きも帰りも吉備の道

一宮あたりで冬の夜の明くる

佐保光俊

水底の色景の見ゆる初氷

デイケアの入浴槽の柚子湯かな

妹の還暦祝ふ実南天

寺の門潜ればひとつ返り花

山の風海の風吹き虎落笛

初旅や朝日差し込むアストラム

仕事場に行く間に聞いて初鵲

餅薬右手に擦り込む左手かな

母眠る部屋を出づれば霜夜なり

冬日和母のズボンを経へり

村上正人

しばらくは峠のもみぢに日の当たる

小春の日一人一人に差しにけり

冬霞たなびく山の連なれる

家も田も冬の霞の中となり

冬木立つぎぎ柄長渡りをり

小啄木鳥来て吾も嬉しき枯木かな

鳥来よとベランダに置く寒の水

石橋の冬の灯人を照らしけり

あかあかと浜の吾照らす冬の月

冬枯の山を四方に里は晴れ

高尾ひとみ

唐梅を薙いつばいに活けにけり
 返り花子らの来る日の間近なる
 境内に初風揚ぐる翁と子
 大とんど消防士らに囲まれて
 神主の御蔭ひ潜みてとんどに火
 遠くからとんどの灰の降り来たる
 残り火で竹に刺す餅焼きにけり
 山水に手赤くして摘む根白草
 何しても大きな音や寒の朝
 寒いですわと言葉交す寺の道

あざみ

初冬の木を見上げては幹に触れ
 よくしやべる友や小春の喫茶店
 アスファルトにボールつく音日短
 丸まれる冬蜂を掃く朝かな
 びしよ濡れの制服を干す真冬かな
 外食へ行く子見送る十二月
 鉢植の柑橘一つ雪催
 厨事終へてゆつくり賀状書く
 和三盆の干菓子サントの形して
 一番に子が出かけたり小晦日

亜矢

ボーナスや明日より歩むブーツ選る
 初雪の睫毛に触るる白さかな
 コンビニに並ぶ聖菓の慎ましき
 後輩の悪阻気にかける年の暮
 寒紅を引いて伊予へのフェリー待つ
 拝みつつ伊予の媼の初湯かな
 足湯して山茶花の散る二三片
 初詣終へ献血の列につく
 待合に山茶花を生け医務始む
 子の泣く蜜柑ジュースに手を添ふる

綾乃

晦日蕎麦京都の湯景を添へてあり
 臘梅や狭き庭にも日の差して
 冬耕や今日もタオルを首に巻き
 日の当たるカーテン越しに冬の蠅
 補聴器をつけぬ一日や冬椿
 寒月や大きな地震の続きをり
 新聞とラジオで過ぎす寒の入
 寒釣や煮口の人の揃ひたる
 冬霧にクレーン伸びる小島かな
 千蒲団静かな町に戻りたり

栄吉

初雪の隣の屋根に積りけり
 初日の出ビルの谷間に輝けり
 新春の富士山を見て帰る道
 裾野より冠雪の富士眺めをり
 世界平和八代の鶴に託しけり
 冬の雨降る音のして目覚めけり
 冬の雨みなの眠れる夜半に居り
 冬の雨障子の内に聞いてをり
 臘梅の雨降る中に咲いてをり
 根白草摘みに奥山へと入りぬ

大畑恵

廻廊に初潮寄する早さかな
 背戸山は冬の紅葉の父の郷
 山茶花の盛りの庵汁粉食ふ
 子の走る音の愉しき落葉かな
 ありたけの寝具並べて年の夜
 神木の太さを問うて初参り
 海辺行く電車の見ゆる焚火かな
 中天の青の深さよ寒の晴
 ビル風の道を抜ければ冬の梅
 ホットレモン推理小説佳境なる

暁子

手鏡に映り冬日が天井に

根菜の残り集めて冬至粥

地に落ちて消ゆる風花見てゐたり

夜の雪見むと玻璃戸に顔を寄せ

雪雲の懸かる遠嶺の奥が郷

杖の位置決めて座したる暖炉かな

湯上りの肌に残りし柚子の香よ

実千両剪りて仏に玄関に

蛤と大根の雑煮郷の味

臘梅の香れる庭に風を受く

すみれ

海光の近きにおいて帰り花

花終ところどころに鳥動き

寒桜来る人のみな立ち止まり

海晴れて母が家近し初電車

クレーンで竹降りてくる大とんど

竹爆ぜて子の叫びたる大とんど

目の合うてすぐに飛び立つ寒雀

誰ひとり乗らぬまま出づ冬の駅

枯蓮の池に鳥影揺れるたり

終点のバス停で降り梅探る

知佳子

教会の十字架光る冬の夜

子に贈る本を聖樹の下に置く

プレゼントされし冬帽被る母

年の暮髪切りたいと母の言ふ

故郷に幼子の来て餅を搗く

凧の糸全部伸ばして走りけり

風邪籠手付かずの本読みにけり

玄関で幼子白き息を吐く

外に居て祖父の大きな嚏かな

いつの間に裏の畑の狸去ぬ

ちどり

山茶花や見知らぬ道を歩きをり

川底に波の光るや冬木の芽

冬鷗水平線に船が見え

犬連れて信号渡る赤コート

廢屋に落葉頻りや夕茜

黒猫に見られて通る落葉道

初雪を知らせる友の電話かな

風花の窓に届きし朝かな

ケーキ分ける二人に聖夜更けにけり

門松を積めるトラック走り去る

退院の夫の所望の握り餅

初空や黄金山の眺めよく

初春の長閑な近所歩きたる

淑やかな謂れある木に触れたれば

玄関に草履の並びお正月

退院の子と水仙の道歩く

子が癸ちし庭に臘梅咲きにけり

輪飾をお辞儀してから外したり

湯浴して冬枯の庭巡りをり

佗助を咲かせる友を訪ねたる

新年の思い通りに起きる朝

初夢は誰かの夢のようであり

堂々と初日の土手に踊る人

飛行機に人影探す二日かな

初暦月の満ち欠け学習す

味見してまた孤食する雑煮かな

喰積を開け入れ替えて待つている

失恋の歌だったのか寒の入

鞍の指とスマホは割れている

中止して安堵の道に月冴ゆる

辻純江

雲雀

ふじ女

霧薄れやうやく朝の日差かな

特急の窓に広がり大枯野

風向きのまた変はりたる大枯野

向うから老夫婦来る枯木道

粉雪の一粒づつを月照らす

初神籤若人一喜一憂す

初日記成すべきことを記しけり

凍星を見上げて家に帰りたる

寒梅が月の明りに照らされて

海風の行きつく駅舎青芭蕉

松田裕子

初雪や吐血に褪める妻の肌

凍星や決して貴方を遊かせない

干菜吊る一人病院から戻り

箸二膳置いて独居の霜夜かな

病室は持ち込み禁止室の花

居酒屋を出て見上げたる冬銀河

クリスマスキャロル流るる帰途ひとり

悴むや一人で向かふ夜行バス

藪柑子我が生き方に悔いは無し

枝垂梅目白が来ては枝揺らす

森口良樹

喚鐘を打ちて始まる冬安居

お元日若き夫婦の靴並び

子供らのなかなか起きぬお元日

臘梅の錆びて薄雪かかりをり

寒の月人の少なき電車ゆく

手袋の手を握りしめ橋渡る

桑門わかこ

冬晴や犬の駆け出すフリスビー

手袋の片方はづし道案内

晩鐘や柚子湯に深く身を沈め

年男なる子の書きし箸袋

生垣の短く刈られ淑やかな

赤き実を付ければ拍手雪兔

高梨英子

初日の出歓喜の中に息を呑む

初空や老ゆる手に巻くガーネット

石段をゆつくり上る初詣

元日や初心者マーク貼り直す

初旬会茶色の靴は下ろし立て

灰の付く洗濯物やどんど焼き

土肥律子

風花やフロントガラスふれてゆき

美しき絵に見慣れし文字や年賀状

読初や買い溜めし本一つ出し

初茶湯親しき友を正客に

主菓子に辰の焼印初点前

大原良子

ストーブに置いて藥缶に湯氣立たせ

新年や幸寿の夢の賑らめり

清々しこごんまりした注連飾

だんだんに耳遠くなり歌留多会

寒菊の白の一輪いとほしき

須美れい

雪舞ふ日マフラー二重にバスを待つ

実南天活けて一息抹茶飲む

臘梅の一枝部屋に香り満つ

白梅の蕾日ごとに賑らみぬ

河原静子

着ぶくれて流星群を探しをり

実千両鳥に運ばれ庭隅に

ビルの間に富士山拝む大旦

同胞と神保町に新年会

高嶋絹代

焼牡蠣の様子をじつと見つめたり

焼牡蠣の殻飛んで灰舞ひ降りて

春近し新しき紅引いてみる

食卓に色どりどりのスイートピー

山崎桂子

夕日照る川面に浮かぶ鴨の群

高きビル冬の日受けて光りをり

初日の出思はず両手合はせけり

金川昭子

初明り遠く弥山に光りをり

はみ出した正の字寝める筆始

結露せる車窓を拭ひ初る富士

熊谷ゆり子

大晦日里の祠に灯のともり

福寿草咲けば重なる父の顔

初稽古鉄の音の重なりて

美耶

カレンダー裾の丸まり年新た

百均の小道具使ひ節料理

上島康子

焼海苔で届く新海苔香りたる

初富士の映像に向き手を合はす

民

四世代揃ひて年の改まる

冬薔薇茎まで深き紅の色

撫子

初夢に初孫の顔願ふなり

今どきの洋の輪飾似合ふ家

みこ子

玄関の壺にあふれて実千両

たちまちに霰の積もる鉢の上

やす保

令和五年十二月度作品集より

大畑恵 私の選んだ十句

晩秋の風吹いてゐる古墳かな	佐保光俊
冬の月あかあかとして神来る	高尾ひとみ
スロープの枯葉一枚拾ひたる	亜矢
大菊を抱へ小昼の清々し	綾乃
旅の果京の新酒を飲み比ぶ	井藤希
日向ぼこ少し薄めの文庫本	栄吉
はや目覚め冬の三日月しばし見る	すみれ
山茶花の道を曲がれば母の家	知佳子
転移なきステーションや小春風	森口良樹
枯尾花向うに瀬戸の海見えて	山野ウタ

高尾ひとみ 私の選んだ十句

冬紅葉目を睨り読むリグ・ヴェーダ	佐保光俊
車椅子畳んで落葉払ひたる	村上正人
脇道があれば歩きぬ雪の朝	あざみ
海風や君のコートに包まれて	綾乃
貴船川沿ひに歩けばしぐれけり	井藤希
人を見に木枯の街へ出かけたり	すみれ
バスの中窓の紅葉に目覚めけり	雲雀
石段を転がりながら枯葉来る	松田裕子
ドア押せば落葉が先に入りたる	やす保
両の手で葛湯の器受けにけり	民